



“よく屈するものは、よく伸び……。”

チッソ旭肥料株式会社取締役
販売第二部長・兼福岡営業所長

木 曾 義 忠

謹んで迎春のご祝詞を申し上げます。

顧みますと10数年前、本誌の前身である「硫燐安時報」の編集兼発行人として、読者の皆様と接しておりました私が、凶らずも再び本誌上でご挨拶申し上げる機会を得ました。誠になつかしく、心から感激致しております。

福岡には約10年前に、2カ年ほど在勤致したことがございますので、今回は2度目で、既に約3カ年を経過致しました。

従って、中央の情勢把握にはうとくとなっておりますので、或いは広い視野からの展望には欠けるかも知れませんが、最近の九州における農業事情を通じて、所感の一端を申し述べご挨拶に代えたいと存じます。

ご高承のとおり当九州地区は、将来におけるわが国の重要な食糧基地の一つとして、多大の期待を担っている訳であります。昭和44年の例の「米の生産調整」以後、高度経済成長下における産業構造の急激な変革に追従し得ないまま、いたずらに農業人口の流出を嘆き、これがため一部には農業軽視の風が浸透しつつあるやに伝えられるなど、今後わが国の農業はどのように展開して行くのか、関係者は均しく憂慮して参りました。

然るに、世界的な食糧危機が喧伝されつつあるさ中、アメリカの食糧および食糧原料の大幅輸出規制の断行説が伝えられるや、俄然、「食糧の自給率向上」を中核とする農業の重要性に対する反省と、再認識論が高まるに至りました。

のみならず、最近では、生活上絶対不可欠な、自然環境の保善に果す農業の役割に対して、新しい評価が高まるに至りました。当然の成行とは申しながら、この評価が今後どのように展開して行くのか、にわかに予断はできませんが、明るい兆(きざし)の一つとして、期待致したいと存じて

おります。

幸い、先きの食糧穀類の輸入は、アメリカの作柄好転が伝えられて事無きを得ましたが、これも束(つか)の間、例の中東和平交渉の行詰りを打開するためにアラブ産油国側が強行致しました“石油輸出規制”は、いわゆる先進工業国の経済・社会生活に痛烈な打撃を与えました。

とくにその使用量の大半を輸入に依存しているわが国への影響は極めて深刻で、危機打開のため、官・民挙げて対策に忙殺されていることはご高承のとおりであります。

しかし、食糧穀類の輸入と云い、石油の輸入と云い、仮に当面の危機を脱し得たと致しましても、一は地球気象が転換期に際しつゝあること、他は、遠からず資源枯渇に遭遇する宿命にあるところから、両者とも需給の恒常的安定は期待し難いとみるべきであろうと存じます。

すなわち、食糧穀類は“自給率の拡大”を、またエネルギー対策としては、かつての固体エネルギー源の再利用から、最終的には核融合を旨とするべきでありましょうけれども、当面する“石油危機”が少康を得るまで、残念ではありますが、肥料をはじめとする各種農業資材も、その影響を回避する訳に参らないと存じます。

しかし、俗諺に“よく屈するものは、よく伸び”とか申しますように、当面する危機の重圧に堪えつつ、われわれの責務である肥料の供給数量を確保し、また吸肥率の高い新肥料の開発等に、懸命な努力を重ねる所存であります。

いささか蕪辞を述べて新春のご挨拶と致します。

昭和49年元旦